

平成27年度「ふくしまの未来を担う高校生海外研修支援事業」実施報告書

県立ふたば未来学園高等学校

実施期間・参加人数・滞在都市・現地交流校について

平成28年1月5日（火）～1月10日（日）間での6日間、1年生9名がドイツのハイデルベルグ市と環境都市として有名なフライブルグ市にホームステイをしながら海外研修をしてきました。

実施概要について

- ・ハイデルベルグ環境政策
- ・環境都市フライブルグの環境保護政策
- ・環境都市を支えるNPO団体（エコステーション）訪問

福島の現状発信や現地におけるエネルギー学習について

<1日目>

○ ハイデルベルグ市内散策

ハイデルベルグの路面電車を見学した後、市内のスーパーマーケットで買い物を通じてドイツの生活を体験した。

<2日目>

○ ハイデルベルグ市内のごみの行方プログラム（市民視点で環境対策を学ぶ）

スーパーマーケットを訪問し、ごみ収集の仕方について見学した。ドイツでは、極力ゴミを出さないよう包装しないのはもちろん、客はエコバックを使用していた。町のあちこちに分別用ゴミ箱が設置しており、リサイクルが徹底されている。市のゴミ集積所では20数種類にわたるゴミ分別がなされる。ペットボトル飲料には25セントのデポジットが載せられ、企業に容器等を回収する義務が課せられている。



○ ハイデルベルグ環境政策

自然エネルギーへの関心は非常に高く、美観地区ですら景観を重視しながら、化石燃料を避け水力発電で電力を補充しようとしている。我々が訪問したネッカー川沿いの水力発電については、景観を損なわないために、水中に発電機を設置している。

～ ホームステイ1日目

生徒たちは緊張の面持ちで、ホームステイに向かった。またこの日は、ドイツのクリスマスの重要な日であり、各家庭でクリスマスのイベントを行っていた。

<3日目>

○ 環境都市フライブルグの環境保護政策

フライブルグ市に30年お住まいの前田成子さんから、2日間に渡って心のこもった丁寧な説明を頂いた。元環境局責任者ヴェルナー博士からは、「フライブルグの環境保護政策」について、これまでの経緯と現状、今後のビジョンなど参考になる非常に有益な講話を頂いた。強力なリーダーシップとあらゆるステークホルダーを巻き込みながら構築してきた信念とその手腕、先見性などに大きな驚きと感銘を受けた。



また、エコタウンウォーバン団地（エネルギー消費を極力押さえたパッシブハウス、ランドヴァッサー居住区〔ゴミ処理から出るメタンガスの利用、市民権を得ているパーク&ライド〕）、小さな河川の小水力発電を見学し、様々なところに小さい工夫と大きな意思決定を見ることができ、その徹底ぶりに大変感心した。

～ ホームステイ2日目

生徒たちは、各ホストファミリーと英語やジェスチャーを使って福島について説明を行った。



<4日目>

- 環境都市を支えるNPO団体（エコステーション）視察とフライブルグ市内での研修・生徒交流

環境都市を支えるNPO団体（エコステーション）での現地高校生・大学生との生徒交流や記念植樹、生徒発表と意見交換を行った。ドイツの学生・生徒は、福島での原発事故や私たちの生活圏の現状について、大きな関心があることを実感した。

《生徒による福島の現状についての発表》

原子力発電所事故の原因から現在の状況を伝え、非難地域を除けば、生活できる放射線量であることを信頼できるデータを用いて示した。

農業分野では、世界の国々と比較してもより厳しい基準の規制値を設けていること。米は全袋検査を実施しており、昨年度は規制値を超えた袋が0であったこと、規制値を超えた食品は市場に通していないことなどから、県産品は最も安全であることを紹介した。

エネルギー分野では、2040年までに県内で使用するエネルギーの100%を再生可能エネルギーで作る目標を発表した。

《現地の学生の質問について》

ドイツの学生・生徒は、福島での原発事故や私たちの生活圏の現状について、大きな関心があることを実感した。その一方で、正確な情報が伝わっていないため、本校生の発表が非常に意義あるものになった。

～ ホームステイ3日目

ホストファミリーとしっかりとしめた人間関係を築くことができたが、ホームステイ最終日ということもあり、寂しい思いをもってホストファミリーのもとに向かった。またこの日はフェアウェルパーティーがあり、ドイツの思い出を語り合っていた。



<5日目>

フライブルグ市内観光（フライブルグ大聖堂、旧市街、ミュンスター広場等）の後、バーゼル国際空港からミュンヘン国際空港経由で帰国した。



福島の現状発信や現地におけるエネルギー学習について

この研修を通して、生徒全員が2,3年次で行われる課題研究のテーマを意識し、学校のリーダーとしての自覚を持ち始めた。また、ドイツの環境政策の視察を受け、事前研究で考えていた日本の環境政策プランに対して、日本の環境と文化を考慮してアイデアを練り直そうとする意欲を持ち、プラン改善をし始めている。

さらに、福島の現状を現地の人たちに説明し、さまざまな質問を受けたことによって、海外の人たちが福島を持つイメージと求めている情報について知り、福島についてより深く考えるとともに、福島に対する知識不足と伝えるための外国語能力の必要性について痛感し、学ぶ意欲を高めることができた。

現地の同じ年代の学生たちの質問や幅広い視点からの意見に触れることにより、グローバル社会で活躍していくために必要な知識、姿勢、考え方などを改めて考える機会になり、普段の授業や日常の生活スタイルにおける良い変化が見られるようになってきている。

今後は、地方創生イノベーションスクールにおける自分たちのプランに対して自分たちが視察してきたこと、感じたことを踏まえた改善をするためにより広い知識と深い思考が必要になる。

